こもりうた97

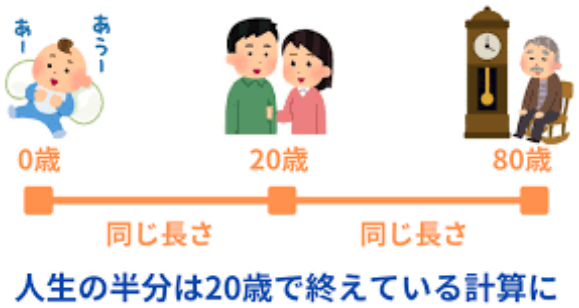
つい先日、慌ただしく年末を過ごし、バタバタと新年を迎えたかと思ったら２月です。すぐに春彼岸がやってきて、息子が４年生になり、「今年も暑いですね～」なんて言いながら盆を越すとまた年末。気づけば辰年。年齢を重ねるごとに１年が短くなると悲観する中高年の皆様。心配するなかれ、あなただけではありません。世のほとんどの方が痛感しています。そしてその現象は〈ジャネーの法則〉と呼ぶのだそうです。

〈ジャネーの法則〉は１９世紀フランスの哲学者ポール・ジャネが発案し、甥の心理学者ピエール・ジャネの著書において紹介された法則。「主観的に記憶される年月の長さは年少者にはより長く、年長者にはより短く感じられる」という現象を心理学的に説明したもの。例えば、５０歳の人間にとって１年の長さは人生の５０分の１ほどですが、５歳の人間にとっては５分の１に相当します。つまり５０歳の人の１０年間は５歳の人の１年間、５歳の人の１日には５０歳の人の１０日。〈ジャネーの法則〉は「生涯のある時期における時間の心理的長さは年齢の逆数に比例する（年齢に反比例する）」ということ。

だそうデス。体感時間の長い短いは、子どもの頃はあらゆることが初体験、歳を重ねれば重複作業ということも関係するのでしょう。

では、ひとつこの法則に抗ってみようではないかとお考えの、少年少女の気持ちを持つ熟年の皆様。ともに策を練ってみましょう。新鮮な気持ちで暮らすということが重要ならば、「日々ダラダラと暮らさない」「毎日新鮮な発見を見つける」「DIY に旅行にサイクリング」「ドキドキする」「不幸になる、苦労を背負う」などなど。しかし、定年まで死ぬ気で働いたから老後はダラダラしたいと思う気持ちも、何をするにも資金は必要だと二の足を踏む気持ちもわかります。散歩しても次々と珍しい発見などありません。経験を積んできたが故に、少々のことではドキドキしませんし、したらそれは胸の病か高血圧です。今更苦労を背負い込むのも悲劇。「若い時の苦労は買ってでも、老いてからの苦労はメルカリに売りましょう」です。再起不能に陥らぬよう、どうか身体はいたわっていただきたい。それに、何が正解かはその人それぞれ。「退屈な日々を送り、あっという間に時間が過ぎて何が悪い。長く感じては逆に困る。同じ時代劇のビデオを１００回見て何が悪い。これこそが理想的な老後だ。」という方もおられましょう。（我が父親）

結論。歳を重ねれば時間が早く過ぎるというのは皆の共通認識。案ずるなかれ、それぞれの生き方が正解。ままならぬのが運命です。



訶梨帝母

川の流れのように～若気の至り～

今から四半世紀程前の話である。

青年期特有の複雑な心理状態となっていた私は、現状を打開すべく喘ぎ、藻掻きながら日々を過ごしていた。拗れた心は希望に満ち溢れた夢を語ることを通り越し、何のために生きているのか?という人生の意義を求める様になっていた。

一個人が社会に取り残されていく焦燥感を抱えて立ち止まってしまっても、流れ続ける時間、社会は歩みを止めて待ってはくれない。青年期の私が抱える苛立ちは、どこか現実逃避を匂わせる放浪の旅へと足を向かわせるのであった。

以前にも書いたことがあるが、舞台は九州・長崎県、父方の故郷である。今回の目的は、はっきりとしている。我が家の墓参り、いや墓探しである。

命とは何か? なぜ私は生まれたのか?

その様なことばかり考えていた青年期の私は、宗教者や識者と呼ばれる方々にこれらの問いを尋ね回っていた。機嫌よく真面目に応じてくれた人は皆無であったが、ただ一人だけ指針を示唆してくれた方がいた。その方は「命のルーツ、自分が何者か知りたければ先祖を訪ね、その由緒と国の歴史を学びなさい」と教えてくれた。

恥ずかしい話ではあるが、私は二十歳を過ぎるまで名乗る姓の墓を参ったことが無かった。父親が自身の出生について語りたがらなかったこともあるが、私自身も事ある毎に母方の墓を参っていたので、それまで取り立てて不思議に思ったことがなかったのである。

父親に墓の場所を尋ねても素っ気なく「覚えていない」との返事で埒が明かない。家系の親族はすべて他の地へと移り住んだのち早世しており疎遠となっていたが、幸いにも母親から本籍地を変更していないことを知らされ、その住所と我が家の仏壇にあった過去帳だけを頼りに現地へと赴いた。

その時点で父親が長崎を出てから40年が経過していた。スマートフォンなんてありはしない、インターネットも電話回線の時代である。地図を現地で調達して聞き込みを続け、辿り着いたのは村の集合墓地であった。

見つけた墓を一言で表せば、緑の塊であった。蔓と苔によって侵食された塊を我が家の墓と認識できたのは、辛うじて判別できた戒名と命日が一致したことによる。

ここからは一心不乱に掃除をし、綺麗になった墓前で線香と蝋燭、花を供えて手を合わせた。この時の清々しさは20年以上が経過した今でも鮮明に思い出すことが出来る。

そして、この時の経験が奇しくも今日の自分へと繋がっていると思う次第である。

先の問いに対する答えが見つかったかといえば否定せざるを得ない。けれども、歩むべき道は分かった。その歩むべき道は都度変わることも心得た。道が都度変わるのだから当然答えも都度変わることを理解した。

歩みを止めてはならない。水も溜まって止まれば、腐るのである。

やっさん

『私説法然伝』（９６）

助けてほしい⑪

先月号では法然上人の弟子になる武者・熊谷次郎直実について書きました。今月号はその続きについて書きます。

【熊谷次郎直実のように武家から僧侶となった法然上人の弟子もいれば、また違う人生を歩んだ者もいた。甘糟太郎忠綱（あまかすたろうただつな）は関東の御家人であり、武蔵七党と呼ばれた現在の武蔵国（現在の埼玉県）の有力武士団の一つの猪俣党の武士であった。

建久三年（一一九二年）十一月十五日比叡山の堂衆・山法師らが日吉山王社（ひよしさんのうしゃ）に立てこもって狼藉を働いており、その鎮圧のために坂東の御家人たちが派遣されることになった。その軍勢の中に甘糟太郎忠綱がいたのである。

甘糟太郎忠綱は鎮圧に向かう途中に法然上人の元を訪れたのである。甘糟太郎忠綱は法然上人に非常に単純明快だが本質的な問いかけ、というよりも己の疑問の全てをぶつけたのである。

甘糟太郎忠綱は武家に生まれ武士となった。なので今回のように命じられれば出陣して戦わなければならない。だがそのような人生を歩んで自分は本当に救われるのか？このままの生き方でも自分は良いのか？と法然上人に思いの全てをぶつけた。

法然上人はただ佛とは我らの行いの善悪であるとか修行するとかしないとか優劣であるとか、そんなことは一切関係なく、ただひたすら我らの計り知れない力、つまり「他力」によって我らを救うのだと。だから甘糟太郎忠綱は甘糟太郎忠綱としてその人生を思う存分に生きれば、必ず往生するのだと、そう話された。

甘糟太郎忠綱はこの時どのような答えを期待していたのだろうか？ひょっとしたら熊谷次郎直実のように、武士であることをやめて出家する道を法然上人から示されたかったのかもしれない。だが法然上人の答えは違った。武士として生まれ武士として生きている甘糟太郎忠綱に、その人生を生きたら良いと答えたのである。これは単純な励ましでも虚無的な答えでもなく、「他力」に生きることがどういうことかを示されたのであろう。この時に甘糟太郎忠綱は法然上人から袈裟を賜ったという。その袈裟を大鎧の下に身に着け、出陣し、戦場で念佛を称えながら往生したという。】

以下次号に続く（征阿）

現在の日吉山王社の地図

波長が合うお経と出会う

下の三冊の経本は、左から『阿弥陀経』・『延命地蔵菩薩経』・『妙法蓮華経観世音菩薩普門品第二十五（以下『観音経』）』です。

日頃、私が自防や檀家さん宅で読んでいる経です。『阿弥陀経』以外は、私のお寺の宗派では馴染みのない、殆ど読まれていない経だと思います。私の場合、『阿弥陀経』が 10%、『延命地蔵菩薩経』が40%、『観音経』が50%の割合で読んでいます。

何宗だからこの経を読まなければならないとか、そういうことも大事かも知れませんが、読んでいて幸せ感があり、うれしくなって元気になるという点で『延命地蔵菩薩経』と『観音経』が上位にきます。参詣者にも自ずと伝わっていると思います。

以前、迷走坊さんが、コロナ過で依頼されるお参りがどんどん減りつつあると心配されていましたが、私は全然感じていませんでした。理由は以上のことですが、お話しても理解してもらえないと思い、その時は何も語りませんでした。

自分と「波長」が合う神仏や経と出会うことは、とても幸福なことだと思います。

昔から人気のある寺院の共通点を研究したことがあるのですが、多くの神仏が祀られ、自分と波長の合う神仏探しができるのだとわかりました。経もそれと同じだと思います。自ずと出会うことを望むことが肝心です。

『延命地蔵経』は日本で出来た経で、その独特の趣を最近になって感じるのです。私にとって一番波長が合う経は、やはり『観音経』です。きっかけは、意外にも柴咲コウさんの CD です。『観音経』の一部に美しい♪メロディーをつけて彼女が歌っています。それが『観音経』との出会いです。

観音菩薩が住んでおられる国「補陀洛（ふだらく）」は熊野灘の遥か南方にあると平安時代から信じられてきました。必然と那智勝浦の西国観音霊場一番札所青岸渡寺や、那智大社を訪れることが多くなりました。

そこから山を下ると、海岸近くに「補陀洛山寺（ふだらくさんじ）」というお寺があります。境内には、昔、補陀洛浄土へ行くために使われた渡海船がり、補陀洛山寺から 25 名の僧侶が観音さまの国へ旅立ったことが記録に残されています。もちろん渡海をするということは「死」を意味することで、お寺前の海岸に立った時の情景が『観音経』を読めば目に浮かんできます。

私にも前世があれば、渡海船に乗った僧侶の一人のような気がします。

俊徳丸